

本号「スキルス胃癌—病態と診断・治療の最前線」を、東京都がん検診センター 入口陽介と千葉徳洲会病院 長浜隆司で企画した。大阪医科大学 江頭由太郎先生が本企画小委員会前に急逝され、ご一緒できなかったことがつくづくも残念であり、衷心より哀悼の意をささげたいと思います。

スキルス胃癌は臨床的にびまん浸潤型、4型、LP (linitis plastica) 型胃癌などさまざまな呼称で用いられており、本誌では過去7回、各呼称で主題として取り上げられている。最後の主題から10年が経過し、若年者の *H. pylori* 感染率の低下、除菌治療による背景粘膜の変化などにより、発生頻度や疫学は変わったのか、モダリティーの進歩によるスキルス胃癌の診断、特にスクリーニング検査における初期病変の確実な拾い上げ、進展度、進行度診断の最前線、いまだ予後の悪いスキルス胃癌に対する外科治療・化学療法の前線線を描き明かにすることを目的として本号は企画された。

まず序説は長浜が執筆した。スキルス胃癌についてのさまざまな呼称の語源や歴史について1930年代の著書・文献をさかのぼり、わかる範囲内で忠実に語源、歴史を明らかにした。これは熱心な読者からスキルスをめぐるある項目についてご指摘をいただき、これにこたえる意味もあり、過去の文献を片っ端から収集し引用文献に忠実に執筆したつもりである。

私自身、普段何気なく使っている呼称の語源・歴史を深く知ることができ非常に有意義で勉強になり、本誌は企画者、編集者、執筆者のみならず熱心な読者により支えられていることを今回改めて痛感した次第である。

主題ではまず病理学的な見地から河内が、病理と臨床の間に存在するスキルス胃癌に対する認識の齟齬を踏まえ、「病理学的スキルス胃癌」、「臨床的スキルス胃癌」に分けたほうが混乱を避けることができ、現在の臨床における使われ方、すなわち「臨床的スキルス胃癌＝LP型胃癌および幽門狭窄型胃癌」を「スキルス胃癌」と呼ぶことが現状により即しているとも言えると述べた。

臨床診断では入口がX線の立場から、小山が内視鏡の立場から執筆した。初期像の所見については従来の報告と同様であるが、primary lesionの発見のためには注意深い観察が必要であり、スキルス胃癌の頻度は検診施設では減少傾向、紹介施

設では増加傾向であることをみると、指導施設レベルでは比較的無症状のスキルス胃癌の初期像は診断されているものの、一般的には初期像の発見はまだ難しい、また検診未受診者が多いのではないかと思われた。また、背景粘膜で初期像、粘膜像の違いがあることを両者ともに指摘している。進行度診断は野津がCT、MRI、PET検査それぞれの画像診断の特徴や有効例を解説した。現状ではスキルス胃癌に対する画像検査は一般的なCT検査による悪性腫瘍進展範囲の診断以外にMRI、PET検査の必要性は低いものの、PET検査では特異度の高さを利用して遠隔転移の診断に貢献していると述べた。

スキルス胃癌の治療については外科的切除、化学療法の立場から磯崎、松原が執筆した。スキルス胃癌の外科治療においては手術の拡大で立ち向かう時代は終わり、患者個々の病態に合わせて治療を組み合わせ、QOLを保ちつつ患者の生存期間を延ばすことが重要であるとし、また集学的治療の重要性を述べている。松原はスキルス胃癌の化学療法について近年の胃癌診療における薬物療法の進歩と治療体系について詳細に論じており、スキルス胃癌に特化した治療開発は難しいが、サブグループ解析などを参考に既存治療薬の有効性の予測は可能であり、すべての薬剤を使い切る治療戦略が重要であると結論付けた。新薬の開発はスキルス胃癌のゲノム解析が進む中で期待される。近年のゲノム解析の結果からもスキルス胃癌は既存の分子標的治療薬や免疫チェックポイント阻害薬のよい標的とはならないことが明らかとなってきた。一方で、異常RHOAシグナルなどの新しい標的分子候補が同定され、今後の治療法の開発が期待されており、また日本人集団におけるCDH1の高頻度な胚細胞変異も明らかとなっており、効果的な予防・スクリーニングの指標となる可能性があるとして述べている。

主題症例の3症例はいずれも臨床的に興味ある症例が投稿されている。

本号ではスキルス胃癌をめぐる最新の知見が各分野のエキスパートにより網羅的に執筆され、非常に読み応えのある号になっている。COVID-19による緊急事態宣言の中、本号は発行されるが、このような情勢においてもぜひ本号を熟読され、いまだ予後の悪いスキルス胃癌に立ち向かうための礎としてほしい。